

<プロローグ>

どうしても、彼らのことを書かなければならない。歩道の上に散り、いつの間にか跡形もなく消えてしまった一枚一枚の花びらたちのことを。

いや、もっと正直に言おう。

どうしても書いてみたいのだ。

---

<成田英二>

昭和52年4月、五十嵐豊一八段門下として成田は3級で奨励会を受験する。札幌の天才児にもさすがに奨励会の壁は高く、試験手合いでの6番の成績は2勝4敗にとどまった。再試験が成田に課せられる。2勝の受験者たちとの決戦手合いで、それを何とか勝ちぬいた成田はぎりぎり奨励会入会を果たす。成田の元に届いたのは奨励会4級で合格という通知だった。

(中略)

結果的にこの5名のなかで奨励会を突破できたのは高田尚平(現六段)ただ一人である。その高田も四段昇段を果たすまでには11年という月日を要することになる。

---

奨励会員の生活について、勉強方法や夢や目標についてである。成田は言葉すくなくにしかし正直に朴訥に答えてくれた。

たとえば勉強方法について。

「いや、こっち基本的に将棋の勉強は嫌いだから。やんない。やるのは実戦だけだね。だって、定跡とか勉強するとみんな将棋が同じになっちゃってつまらないもん。だから高橋道雄(現九段)さんとかと一対一で何番も指して教わる。あと奨励会員たちともね。その実戦だけでそれ以外の研究はこっちまったく興味がないから。序盤なんて何やったって同じだから」

私はそれを聞きながらなるほどなあと感じた。奨励会といえども自分の将棋のスタイルを守るために定跡などはわざと吸収しないようにしているんだ。

「詰将棋は？」

「いや、こっち詰将棋は作る方で、解くのはちょっと」

これもまた感じた。なるほど奨励会二段にもなると詰将棋を解く訓練なんか卒業で、作る側に回っているものなんだ。

---

「今、生活保護を受けているんだって。きっとこっちのせいだよ」

離婚をした内山佐知子は、やがてパチンコ店の職を追われる。45歳になる子持ちの佐知子にも不況の風は容赦することなく吹き荒れ、いくら新しい職を探し求めても徒労に終わるとい日々が続く。その上佐知子には成田と違って養わなければいけない三人の子供があった。行くあても働くあてもなく、結局は生活保護を申請するよりなかった。自分はどうなってもいいけれど、三人の子供を飢え死にさせるわけにはいかない。

「こっちとつきあったせいで、離婚しちゃったんだから」と成田は小さな声で言った。

---

初めて札幌の将棋道場で見た天才少年の姿を思い出していた。

私などはとても入れない、有段者専用の畳の部屋にどっかと座り、背後から太陽の光を受け逆光の中で扇子を忙しくあおいでいた天才少年成田英二。小学3年で三段になっていた彼の相手になる大人ももうそこにはいなかった。

その少年が棋士になるという、名人になるという大きな夢を抱いて東京に出て、挫折してその夢のたどり着いた場所がここだというのだろうか。ここが成田の夢の行方だというのだろうか。